
ゆびのわ物語（FA/RE/girl）

omotenac

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆびのわ物語 (FA/RE/girl)

【Nコード】

N9734M

【作者名】

omotenac

【あらすじ】

ロイエド女体化

偶然2人で一晩を過ごすことになる

広大な駅舎内はまるで迷路だ。そっけない表示を頼りに歩き続け、ようやく辿り着いた北口改札を抜けたエドワードは目の前の光景にしばし驚き立ち尽くした。

使い慣れた駅の、けれど始めて使う改札口。直線距離にすれば大して離れていないはずなのに、光景はよく知る南口のものとはまったく異なる。

ここセントラルシティは国の首都で、駅の南口から真っ直ぐ伸びた大通りの先には政府の機関が揃う。

正式な軍人ではないが軍属の肩書きを持つエドワードの、この街での行動範囲はもっぱらその駅南側に限られており、真反対の北側に来るのは本当に今回が初めてだった。

官公庁が多いだけあって整然と美化された南口とは違い、狭くこたごたした感じのある北口は、分かりやすくいうなら下町然としている。

建物の外装、行きかう人の服装、車の種類。街の雰囲気を作る要素のほとんどが、エドワードがよく知る南口周辺とは対照的な商売風のものだった。

元からにぎやかな場所であるだろうに、その上今日は祭の飾りつけもされている通りは華やかだ。

どこの店先にも派手な造花の飾りや灯籠が吊るされ、色のついた紙越しに柔らかい光がぼんやりと通りを染めている。

冬の祭りは、暦の上で春の初めと呼ばれる日を挟んで三日間行われる大々的なものだ。

今日はその初日で、日暮れと共に最初のパレードがはじまると列車で乗り合わせた人の話で聞いていた。

エドワードが生まれ育った東部の田舎でもその日には村全体の祭りが開かれていたが、田舎の小さな村と国の首都では当然ながら祭の

規模は違う。

さすが首都の祭だけあって、金曜の晩のパレードに始まり日曜の夕方の花火で終わる三日がかりの大騒ぎ。

外国からも珍しい見世物やとても有名なサーカス団がやってくるという。

そんな特別な日のために地方から数日をかけて物見遊山にやってくる客も多く、祭期間中のシティの人口は三倍以上に膨れ上がるのだとまだ田舎から出てきたばかりのエドワードに教えてくれたのはセントラルに勤務していた頃には当然祭の警備に借り出された経験のある軍人たちだった。

『祭の間はセントラルに近づくな』

人が増えればそれだけトラブルも増える。ましてや誰もが浮き足だっている祭の最中だ。

喧嘩に盗難。迷子に忘れ物。人員をフル稼働してもまだ手が足りなくなるほどの忙しさで三日間の間に数時間しか眠ることができないほどだと切実な顔で語るのを話半分に聞いていたが、自分の今日一日を思えばなるほどと納得せずにはいられなかった。なにせ、首都へ終結する人の群れには、旅なれた自分でさえ辟易とさせられたのだから。

一年中探し物の弟と旅を続けるエドワードはつい昨日まで南部の町にいた。

エドワードたちの兄弟が研究する錬金術の資料は秘密保持のため時として思いがけない分野に姿を買え一般書籍にまぎれていることがあり、今回は元々希少本である数冊を保持している愛書家を訪ねた。子供というだけで面会を断る愛書家が多い中、比較的好意的に出迎えてくれた御仁と色々な話をするうちに、富豪の友人でセントラル在住の人物が別口で探していた本を所持していることがわかり、すぐにセントラルへ連絡をとりついで貰ったが、その人物が告げた閲覧の条件は明後日の昼までにセントラルの家へ来ること。

午後からは旅行で西部行きの列車に乗るから、それが妥協ぎりぎり

の時間設定だと説明された。

勿論すぐに行く、と即答したがこちらもまだ南部で資料を探さなくてはいけない。だからすぐさま二手に分かれ、弟は南部に残り、エドワード一人が汽車に飛び乗った。

南部の中心都市であるサウスシティからセントラルまで、普通なら夜行列車で寝ながらの旅だ。しかし祭の直前ということでセントラル行は夜行どころか臨時便の一般車両でさえ満席という状態。仕方ないから車両の木の床に座り込んで長い時間を過ごしてどうにかセントラルにたどり着いた。

辿り着いたはいいがそれから大変で。

朝から今までの長い一日を思い返せばため息が出た。

明日の面会まで宿で休もうと思っても、これだけ人が多い祭りの日に当然ながら宿に空き部屋などない。

こういった時の宿は屋根裏や地下室まで全て開放するのは常識だが、物置や階段下まで全て何ヶ月か前には予約で抑えられているし、それ以前に市の条例で子供一人で泊めてやることは出来ないと宿の対応はどこまでも素っ気無い。

あまり好まないが、仕方がないのでこの際軍の施設を使おうと思えば、こちら満杯だと断られた。

本来なら、国家錬金術師の肩書きを持つエドワードがそんな理由で宿泊を拒まれるのはおかしいことなのだが、どうやらエドワードの直属の上司をあからさまに毛嫌いしている人々が揃って宿泊するらしいと聞けば宿を確保するために粘る気力は失せた。

ごり押しすれば、他の滞在客に無理をいって部屋を確保できたかもしれないが、そんなことをすれば生意気な子供だとすぐに尾ひれがついた噂が広まるし、空気が気まずい施設では休まるものも休まらない。

だから諦めて街に戻って、とうとう最後の切り札に頼ることになったのだ。エドワードは財布から取り出したカードをもう一度眺め、誰に言うでもなく呟いた。

「使って…いいよな？」

カードは白い厚手の紙。それに緑のインクでホテルの名前と住所が印刷されている。

ウォールワース通り17番、バートラムホテル。

そして裏返せば、整然とした太い筆跡の署名がある。

三 五号、ロイ「マスタング」。

それはエドワードと同じく国家錬金術師の肩書きを持つ軍人で、まだ未成年のエドワードの後見役でもある男の名前だ。

国家錬金術師の数多い特権の中には軍施設の無料使用も含まれるが、どうにも嫌われやすい後見人と、後見人以上に嫌われやすい自身自身の存在のせいで、エドワードは周囲の大人たちから露骨に嫌いだと態度で示される場所も多かった。

そんな、自分では望まないトラブルを複数経験した果てに、公的な用事で呼び出される以外は街中の宿を取るようにしたエドワードへマスタングがこれを渡したのはもう一年以上前のことだ。

『もしセントラルで宿に困ったらここに行きなさい。』

私の知人がやっているんだ』

現在東方に籍を置く男は、それ以前はセントラルで勤務していたから知り合いがそれなりにいるのだろう。

『一部屋借り切っているから使いたまえ』

金がかかることだろうにと単純にあきれたが、本人は浪費とは思っていないらしい。

『ほとんど荷物置き場だが下手な貸家より快適だよ。掃除も行き届いているし、使いたい時は予約なしでいつでも使えるのだから』

そういった言葉の裏には、この東部での勤務を何年も続ける気はないという含みもあるのだろうと意地悪い考えもできた。二十代で大佐の地位に上り詰め、東の地では実質、司令部のトップといっても過言ではない彼には野心家という言葉がよく似合う。

次に彼が中央へ呼び戻される時には、史上最年少の将官の地位が与えられるに違いないと確信を持った噂が囁かれるのをエドワードも

耳にしたことがある。

耳にしたところで、実際に軍隊の階級社会とは縁遠いエドワードにはいまいち実感できなかったけれど。

宿の主人には話を通してあるからこのカードを見せさえすればすぐに泊まれる。

そんな説明と一緒にカードを受け取ってから今までの間には何度もセントラルシティへ来たが、普段は南口の近くに居心地のよい宿を見つけて専らそこばかり使っていたし、他人の自室といってもいいような場所に行くのは憚られて一度も立ち寄ったことはなかった。

しかし、今日ばかりはこれにすぎるしか道はない。

野宿には慣れているから、冬の町でも寝場所を確保する方法もないことはないが、祭の期間中は風紀取締りのため、十一時を過ぎれば未成年の外出を禁じるためのパトロールがあると聞いている。エドワードは未成年だし、身分証の銀時計を見せても簡単に国家錬金術師だと信じてもらえる可能性の方が低い。

なにより、下手に補導されでもしたら、後でどんな噂がばらまかれるかわかったものではない。自分だけならいいが、縁故が幅をきかせる軍という世界では後見人が攻め立てられることになる。

そもそもこのカードを後見人がくれたのは、そんな類のトラブルを回避するためなのだから、だったら使うべきだろう。

そう決めれば気持ち急いた。なにより体が疲れていて少しでも早く乾いた部屋で休みたかったのだ。

いくら大人顔負けの体力を持つエドワードでも、列車で立ちっぱなしの移動、それから雨の中宿探しで何時間も歩き回って体に疲労を感じていた。

「使えって言ったのはあっちだしな……」

こちらが頼んだわけではない。

あちらが提供してくれる物を利用するだけだ。

そうやって自分に言い聞かせて改札から道路を渡る。

ひとまずドラッグストアに飛び込み、少しばかり買い物をするつい

でに道を訪ねれば、目指すホテルはその先の角を曲がってすぐのところだと教えられた。

教えられた先にあつた、赤と白の縞模様の庇が突き出た建物まで近寄ってみればそれはどうみてもレストランではないだろうか。まだ準備中らしく、開け放たれた入り口から覗き込めばやはり祭用のディスプレイを施した店内ではウェイトレスが忙しくテーブルセッティングをしている最中。

自分の勘違いかと視線をめぐらせるとレストランの脇、隣の建物との隙間に狭い階段があり、エドワードが持っていたカードと同じ口ゴを刻んだプレートが打ち付けられていた。なるほど、地階がレストランでその上がホテルなのか、と納得して階段を上る。

大佐といえばそれなりの地位だから高級ホテルを想像していたけれど、ちんまりとした入り口同様、曇りガラスの扉を押して踏み込んだホテルの内部は小規模で簡素なものだった。

「いらつしやいませ」

ドアベルを聞いて奥から中年の男性が出てくる。

エドワードが手に提げたトランクを見て客の、大人と別行動で来た予約者と判断したのだろう。

「ええと、親御さんのお名前は？」

帳簿をめくって名前を探そうとする。

「えっと 予約、してないんですけど」

まさか子供一人で宿泊するとは思わないのだろうか。

エドワードの問いかけに大人は目を見開き、それから首を横に振った。

「今日は祭りだから満室だよ。」

それに市の条例で子供一人じゃ泊められない」

「だからこの人の部屋：使わせて貰いたいんだけど」

取り出したカードを裏返して見せる。

男の手がいささか怪訝そうにホテルの白いカードを受け取り、裏書のサインを見て首をかしげた。

「その、マスタング…さんの」

こんなところで階級で呼ぶのはふさわしくない気がして、とっさに使った敬称にはひどく違和感があった。

知り合って三年近く経つけれど、あの大人を階級以外で呼んだことはまだない。

「では、お客様がエルリックさん？」

「…はい」

答えると、男はどこか驚いたような顔をして頷き、それと同時に傍らの電話から受話器を取り上げた。

どこにかけるのだろっ、と胸に不安がよぎる。

自分の名前を知っているということは間違いなく大佐から、エドワード・エルリックが来る可能性の伝達が行われているはずだ。

だからといって、客が長期契約している部屋に他人を踏み込ませることはできないことも想像がつく。

まさか軍部に電話をするのでは、とあまりよくない想像を巡らせていたが、ややあつて繋がった電話に対する男性の発言は、違う意味でエドワードを驚かせた。

「失礼しますマスタング様。」

ただ今、エルリック様がフロントにいらっしゃったのですが」

今日見せてもらった本の論点を書き記すのは簡単で、できる限り時間をかけてもすぐに終わった。

そうすればもうすることはなくて、つい視線は目の前に向かう。

書き物机の上には布の覆いをかけた鏡があり、覆いを剥ぎ、現れた鏡面に映る自分の顔に問いかける。

「…何やってんだか」

顔にも声にも混じるのは疑問符。そして同時に頭の中では計算が渦巻く。

自分と大佐が同じ日にセントラルにいる。

しかも自分はいつも一緒の弟とたまたま別れて単独行動で、宿がなく、大佐が教えてくれたホテルに来て、二人が鉢合わせる。

全てを計算したら、空から金貨が降ってくるよりは高確率とはいえほとんど奇跡的な数字での遭遇だ。

フロントの男が、大佐はエドワードより少し前にホテルに戻ってきたばかりなのだと説明するのを呆然としながら聞いて、どうすればいいものかうつらたえている間に彼はすぐやってきた。

『やあ、鋼の』

しかし、大人の態度は不思議なほど平坦だった。

フロントから電話を貰うと自らロビーに降りてきて、自分を眺め回すから礼のごとく嫌味の一つでも言われるのかと思ったのに、

『よく来たね。疲れたろう』

わざわざエドワードの手からトランクをとって自ら荷物運びをしてくれるという親切ぶりだ。

それに加えて、初めて見る大佐の軍服以外の姿は別人のようで、どうにも調子は狂った。

ロイ＝マスタング、自分にこのホテルを紹介してくれた後見人はいつもの青い軍服ではなく、濃いグレーのスーツで身を固めていた。

黒髪も、いつもは前髪を無造作におろしたままなのに、今日は整髪料で撫で付けて額を出すスタイル。

同一人物とわかっていても、見た瞬間にはまず戸惑いを覚える。

けれど大佐の方はそんなエドワードの心情には気づかなかつたらしい。三階の一番奥にある部屋へ着くとすぐ浴室へ押し込まれた。

一目でこのホテルは随分とサービスが行き届いていることがわかる、綺麗で快適な浴室だった。

全体が清潔だし、蛇口を捻ればすぐに透明で熱いお湯が出てくる。

柔らかいタオルは枚数も惜しめない。

エドワードも旅暮らしは二年以上、泊まった宿も数多いから、浴室だけでもサービスが行き届いていることがわかるこのホテルには素直に感心した。

気分良く体を温めてさっぱりして出てくれば、次は階下のレストランから運ばれてきた夕食が待ち構えていて、祭の晩に必ず食べるカブの料理からデザートまでご馳走を満足するまで食べた。

そこまでは良かったのだ。

確かに大佐と鉢合わせたのは驚いたけれど、ホテルは快適で居心地が良いから気持ちは弾んだ。

いつもなら人をからかうようなことばかり言う大佐も今夜は私服のせいか雰囲気違って、司令部で面会する時とは違う穏やかな会話が出来た。

大佐は先週から出張でセントラルに来ていたが、この週末に私用があるから、同行の部下と別れて一人でこのホテルに泊まっていたそうだ。

後見人である大佐のいる東方司令部へは定期的に顔を出す必要があって、レポートを持って訪ねて行けば自分と弟を可愛がってくれる優しい中尉と会えなかったのは少し残念だったが、大佐が今しがたセントラルの古書街で入手してきた本を見せてもらえたのは大きな収穫だった。

今夜はゆっくり休んで、明日約束の相手に会って本を見せてもらっ

たらずぐに南部に戻る。

気持ちにゆとりが出来たせいか会話は弾み、食事の後もしばらくお茶を飲みながら色んな話していたのだけれど、ルームサービスのワゴンを下げてきたホテルの従業員は、二人に対してひどくバツの悪そうな顔で告げたのだ。

『申し訳ございません。今夜は予備寝台が全て出払っておりまして』急に泊まることになったエドワードのために大佐は予備寝台を入れるよう頼んでいたのだが、今日は祭の見物客でどの部屋も客を詰め込んでいるから、予備の寝台はもう残っていなかったのだ。

突然頼んだこちらが無理を言っていたのはわかつているが、だからといって、大佐があまりにもあつさりと

『それなら一緒に寝るとしよう』と従業員に向かっていうものだから驚いた。

ベッド自体はダブルサイズだし、常客なら多少の融通は利くのだろう。従業員は礼を述べ、すぐに余分の毛布と枕を持ってきた。

「一緒にてなあ……」

鏡に向けた視線は、眉間に皺の寄った自分の顔から胸元に落ちた。大佐は入浴中で部屋には誰もいない。借りた夜着の前ボタンを三つ外せば、年齢の平均から考えれば発育は悪いだろうがそれでも僅かに膨らむ胸が露になった。

けれど、全く目立たない胸とは対照的に肩は異質で、機械鎧の無骨なフォームが布越しに浮かんでいる。

右腕と左足と、欠けた肉体を補う機械の義肢が無骨に光る子供の体。年齢の平均から考えれば発育は遅いがそれでも僅かに膨らむ胸は女のそれだ。

ごく一部の親しい人を除きエドワードⅡエルリックが女であることは知られていない。

かつて内乱の影響で故郷の中心部が焼き討ちになり、戸籍謄本が消失したせいもあるらしいが、とにかく軍が持つ自分のデータは性別を間違えられていた。

けれど、それを指摘せずにおいたのは男と思われた方が利点が多いからだ。

ただでさえ十代前半の受験者は若すぎるということで反発は多く、大總統の一声で国家鍊金術師試験の合格が決定してもなお不満の声をあげる声はあった。

ましてや女となれば、いくら女性軍人が多いこの国の軍隊でもさらに批難の声は高まるだろうし、旅暮らしではいくら子供でも女といえれば危険は高まる。

当然ながら大佐にもそのことは秘密だ。

始終一緒に行動していれば無理かもしれないが、幸い旅暮らしのエドワードが大佐と会うことはよくて月に一度。どうにでも誤魔化しは聞く。

だから、同じベッドで寝ればいいと言われてもエドワードには反論する理由がないのだ。

そう、ベッドが用意できないだけなんだから。

一緒に寝るくらい、なんでもない。

「まだ終わらないのか？」

けれど、浴室のドアが開き涼しい声が聞こえれば心臓は不自然に脈打つ。

慌てて胸のボタンを留め直すが、そうしている間も鏡に移る大人はどんどんこちらに近づいてくる。

「鋼の？」

大佐が風呂に入る前から書き物机に向かっていたのだから、まだ終わっていないといえば不審がられるのも仕方がない。

「その…今終わったとこ！」

そうして振り返れば、風呂上りの大人はもうごく間近にいた。石鹸の匂いは別段珍しいものでもないのに、間近にある無防備な大人の姿は見えてはいけけないもののように思えてついと視線を逸らす。

初めて会ってから今まで、記憶にある限り軍服でないロイ＝マスタングを見たことなどほんの一二度だ。

まるで別人のようで、落ち着かない。

「だったらもう何もすることはないな？」

「うん……」

内心の動揺を悟られぬよう、できる限り平静に答えると、

「じゃあ寝ようか。今日は私も疲れた」

大人はこともなげに言ってベッドの上掛けを剥いだ。

「実をいえば私はあまり寝相が良くないんだ。

だから君が壁側に」

いつもなら一体どんな寝相だ、とからかっているだろうが、今はそんな気にもなれない。

大佐がベッドの上掛けを剥ぎ、先に寝るよう進めるからおとなしくマットレスに横たわる。

できるだけ場所が空くよう、壁にぶつかるほど端によると、大人はそんなエドワードに毛布をかけ、自分もベッドに潜り込んできた。

けれど、毛布の中には入らない。

「……なにしてんの？」

エドワードは毛布とシーツの合間に寝ているのに、大佐はその一枚上、毛布とベッドカバーの合間に体を潜り込ませたのだ。いくら暖房が利いているとはいえ、それでは寒くないかと心配になる。

「言つたろう、寝相が悪いんだよ。」

君、一晩中私に抱きつかれたまま眠れるかい？」

「遠慮しとく……」

随分前に大佐の奇妙な寝相については聞いたことがあった。

部下の中でも特に大佐の世話を押し付けられがちな少尉が、いつも手放さない煙草の箱をベッドに見立ててその様子を教えてくれたことがあるのだ。

『毛布丸太みたいに丸めてしっかり抱きついてんの。ありゃ一緒に寝る女は大変だよな』

こうやって毛布の仕切りがあれば被害にあうことはないだろうと希望的観測で目を閉じた。

だが、いつもの習慣で無意識に毛布の上に出した手を大人の手に掴まえられたから驚く。

「な、なに……っ？」

生身の、左手だ。

唐突に握りこまれ、何をするのかと戸惑うエドワードの視線も気にせず大佐は子供の手を持ち上げ、隣に寝た姿勢で顔の真上にまで運ぶ。

「君、手には何か塗っているのか？」

「え……別に」

手が荒れているのは自分でも良くわかっていた。

着替えの最中、布に指先の荒れがひっかかる不愉快な感触を味わうのはしょっちゅうだ。

ただでさえ乾燥する冬だし、年中本や書類に触れる手からは自然と油が抜ける。

わかっていただけけれど、人から指摘されるとひどくいたたまれない気持ちになった。

触れてくる男の手が綺麗だから、余計に。

「さつきから気になってたんだ。荒れてるじゃないか」

呆れたような言葉と一緒に大佐は上半身を起こし、

少し無理な体勢から書き物机の上にあるものを取った。

保湿クリームだ。丸い缶を開け、白いクリームを指でたっぷりと掬いあげてエドワードに見せてくる。

「寝る前に塗っておこう」

提案は唐突で、断る暇もない。自分の手に薬を塗ってくれるという大佐は、傍目に見て心配になるほどの量を重ねた手のひらの間でこすり合わせ、それからエドワードの生身の手をしっかりと包み込んだ。

まずは指、それから手の甲、手首の先までしっかりと大人の手が滑っていくのは奇妙な感触だった。

風呂上りのせいか熱い手のひらの温度や、軍人の中ではさして体格

が良い方ではないのに、大人の男であることを思い知らされる骨格が奇妙な生々しさを持って動くのを肌で知る。

ちらり視線をやれば、半乾きの黒髪の隙間から覗く瞳はひどく真剣にエドワードの手を見つめていた。

力で抑えこまれていくわけではないのに、抵抗もできず己の手はされるがまだ。

「しかし細いな」

大佐が妙にしみじみと呟いた。何が、と不思議に思いながら視線の先を追えば、大人の親指と中指が作った輪の中で自分の手首が泳いでいるのに気づく。

それから、伺うような黒い瞳にも。

「ちゃんと食べているのか？」

「普通だけど…」

「量よりも質が大事だよ。」

君のことだから面倒くさがって不規則な食生活をしてるんじゃないか？」

否定はできなかった。

「今は若いから気づかないだろうが不規則のツケは必ず体に出て来るんだ。現にほら、見てごらん」

先ほど気になった多すぎるクリームは、体温と摩擦で丹念に塗りこめられ、いつの間にか肌に吸い込まれきっていた。

「これだけ乾燥しきってるんだ。こまめに塗らないと駄目だよ」

なんならこれを持っていきなさい、と缶を譲られそうになって慌ててエドワードは断る。

「持つてるんだ。それと同じの」

濃紺の地に白で小鳥が描かれた缶は国中どこでも見かける商品で、エドワードのトランクの中にも同じ物が入っている。

「それなら余計だ」

「んー…片手だと面倒でさ」

機械鎧の右手でクリームを塗りこむことは出来ない。

鎧の弟にも頼めないし、片手での作業はなかなか難しいのだ。それと気づいたらしい大人は少しばつの悪そうな顔をしながらもまたクリームを足してエドワードの手に塗りつける。

「荒れていたら自分の顔を触るのも痛いだろう。」

それに、君だっていつ手を繋ぐ相手が出来るかかわからないんだから手入れはしておきなさい」

いかにも女たらしと名高い大佐らしいお言葉だ。

「そんなのないから」

「わからないよ。出会いは突然やってくるものだ。気を抜いてはいけない。」

君だって、いつかここに指輪をはめる日が来るかもしれないんだから」

そういつて押されたのは左の薬指だ。

心臓に繋がる血管があるから、互いの命を繋げる場所として婚姻の指輪をはめる場所。

エドワードは当然ながら、独身の大佐の手にも光る物は無い。

「…年からいつて大佐が先だろ」

十四も年上の大人は、けれど大人の社会で見ればまだ三十前のひよっこだ。

男は家庭を持つて初めて一人前、という風潮は強いし、その気になればすぐ相手も見つかるだろう、地位も容姿も申し分ない男は、果たしていつ結婚するのかと噂する声はあちこちで聞いてきた。

「どうだか。私は家庭向きの人間ではないからね」

声は平坦でも内容は意味深。

あまり聴かない方がいいことなのかと思い、エドワードは違う話題を探した。

「あの、俺、自分でやる時ってここ使うから、一応塗れるけど完全じゃないんだよな」

腿の上にクリームを広げて手に塗りつける行為を寝そべったままジェスチャーで教える。

「だから、こんな丁寧にしてもらうの…助かる」

お世辞というわけでもないがどうにかありがとう、と礼を述べれば黒い瞳が少し笑った。

「どういたしまして」

こういうところが女にもてる理由なのだろうか。

素直に優しい。本当はどうか知らないが、少なくとも今はそんな雰囲気に満ちていた。家庭向じゃないと言うが、結婚したら案外良い夫や父親になれるのではないだろうか。

彼の親友のように、子供をとろけるような眼差しで見ている場面を思い描いても違和感はなかった。

けれど言葉にはできず、黙ってマッサージを受けていれば手のひらと甲が終わり、今度は指だ。

再度クリームをたっぷりと塗りつけて、付け根から爪の回りまで。

指の一本一本を丁寧に扱いて、さらに自分の指を絡めてくる。やがて、大佐の手と自分の手が祈る時の形で組み合わさり。

「……………」

瞬間、妙な感触が背中を走り抜けた。

なんだろうこの、背中を抜ける独特の感触。

電流にも似ていたが違う。ひどく落ち着かなくて、じっと座っていないようなもの。

落ち着かなくて手を引くけれど、大人はそれを許してくれず握る力をこめてくる。

体温で緩んだ油脂が互いの肌をぬるりと不意に滑らせて、それがもう、いけない。

「ご、ごめんっ！」

怒りたいような泣きたいような、けれどどちらとも説明のつかない妙なざわめきが嫌で、咄嗟に大人の手を押さえる。

「…もう、いいから」

驚いたような大人の顔に、ひどいことをしたと罪悪感も沸くが、

これ以上続けられてもじつとしていられる自信はなかった。

なんだろう、説明のできないこの感覚。上手く言葉は見つからなくて、気まずくて、どうすればいいかわからない。かといって、毛布の中に潜り込むような子供っぽい行動にも抵抗がある。

「じゃあ寝ようか。おやすみ」

けれど大佐は優しく言うだけだった。

むしろエドワードを気遣うように缶を閉め、自分も再びベッドの中に潜り込んでくる。

「明日は六時半でいいか？」

「うん……」

「さあ、もう寝ないとすぐ朝になるぞ」

おやすみ、と低い声が告げて最後に残った卓上ランプを消す。それで室内はすっかり暗くなったが、今日は祭の夜だ。パレードが行われる大通りから離れているとはいえ夜の勢いはあって、酔っ払いの歌声らしいものがかすかに聞こえていた。

「賑やかだな、ここ」

部屋は暗くなって、家具の輪郭が辛うじてわかる程度。その浅い闇の中でぼつりぼつりと会話は続く。

「いつもはそうでもないがね。」

それより鋼の、明日は汽車の切符をとっているのか？」

「いや、まだ」

「それなら用事が終わったら祭見物でもしないか。」

まだセントラルの祭は見たことがないだろう」

明日は祭の二日目。首都行の便は満杯でも逆に地方へ下る便は空いているはずだから寝台車をとればいい。

そんな風に段取りをつける大人の声を聞いていれば自然と笑いがこみ上げてくる。

「今日の大佐、なんでそんなに優しいの？」

「失礼な。私はいつでも優しいだろう」

真面目な声が答えた。

「…そういうことにしとく」

そろそろ眠気も強まり、語尾にはあくびも混じる。

それに呼応するように、寝具越しに大人の手があやすようにエドワードの腹の辺りを叩いた。

「…おやすみ」

挨拶をして、壁に顔を向けて体を丸める。

ややあつて大佐は反対に体を向け、すぐに静かな寝息が聞こえ始めた。随分寝つきのいい大人の横で、けれど子供は眠れない。

手が変だ。お休みと叩かれた部分も、触れ合う背中も、大佐が触ったところだけがじわりと熱を帯びる。

顔の間に手を持つてくれば、クリームが肌に馴染むにつれ立ち上ってくる、特有の甘ったるい香りに酔いそうだった。

(…変なの)

思い返せば昨日から全てが予定外のことばかり。

一昨日の今頃、まさか大佐と並んで眠るなんて思いもしなかったし、一緒に眠る大佐はどこかいつもと違っていて、とにかく奇妙な一日だった。

優しすぎる大佐も、触れた箇所を妙に意識している自分も変だ。けれど嫌ではない。

「……たいさ？」

呼びかけてみるが返事はない。もう眠ってしまったことを確認してからエドワードは体をずらし、大人の背中に自分の背中をぴたりとくっつけてみた。

肉の厚い背中だ。神経をすませると体温や鼓動まで伝わってくるように、安心する。

多分、こんなことは二度とないのだ。少しくらい甘えてみたって悪くはない。

大佐の知り合いの中で、この部屋に足を踏み入れたのはエドワードが初めてだと言っていた。時折噂で聞く、大佐と出かける姿を目撃される大人の女性達だって知らない空間と時間を、自分が独占して

いるのと思えば、なんとなくいい気分になる。

背中をくっつけていれば大佐の規則正しい寝息に釣られ、眠りの波が近づいてくるから、瞼を閉じれば深い眠りの世界に落ちるのはすぐだった。

その晩は本当によく眠ったから、エドワードは奇妙だけど暖かい夜の結末を知らない。

エドワードがすっかり寝入った頃、こっそりと起き出した大人が、飽きることもなくその寝顔を眺めていたこと。

大人が毛布の上に寝たのは、婚姻前の男女が共に眠る時はシートで貞操の仕切りを作るべきという古めかしい慣習だということ。

性別を偽る少女の嘘に付き合いながら、小さな体のあちこちに残る傷に胸を痛めていたことも、これからの旅が少しでも平穏無事であればいいと、祈りに変わって、眠る子供の薬指にくちづけしていたことも。

その指に、やがて大人と揃いの指輪がはめられる日が来ることも、心地よく眠る子供はまだ何も知らないままだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9734m/>

ゆびのわ物語（FA/RE/girl）

2010年10月10日11時48分発行